

●高澤良一 第九句集 寒暑

●四月―六月

野毛山の十日も早き山ざくら

潮吹く馬刀天に唾する如くなり

足型に三種類あり鳥雲に

尾根辿れば当り籤めく山ざくら

早咲きの花のいたづら心かな

鶉の花懐にかしましや

勘違いして咲く花に相違なき

花の情一入なれば酒にせん

こんな日が三日続けば花吹雪

落花嗅ぎ年寄る象の浜子さん

花を見る目配りにさへお人柄

灌仏の柄杓のやりとり見ず知らず

花は今高知の城下に来てみいや

黙々と手を運ぶのみ浅蜷掘

武州金沢八景乙艦海岸

浅蜷掘吾れは干潟の南端を

浅蜷掘腰を伸ばして一くぎり

磯遊び馬穴覗きにくる子かな

浅蜷らの小田原評定鍋の底

靖国神社

かんばせに靖国神社の花の風

えらき坂の花の靖国神社かな

御社に花の東京の標準木

東京の花見がてらの通院日

花どきの乳首の脇へ聴診器

花を見て花の生み継ぐ風を見て

林間を真一文字に花吹雪

花の間尾長が通り過ぎしのみ

墨堤に花人となる足慢ろ

花堤さてとこからで折り返そ

花吹雪こりやまたなんと佳き風情
風太郎よこぎる飛花に眼を上げて
うたた寝の風太郎にも隅田の春
けふあたり出向きおかねば散る花ぞ
花見支度し居れば雨や肩すかし
お花見のおあづけとなる朝の雨
鼻先をよぎりて飛花の舞踏団
満開のけふを逃して何とする
無理強いをして花奪ふ風の暴
大鴉姿くらます花の奥
子と探すおたまじやくしの密集地
鳥がゐて写真家がゐて桜の木
花の山絶えず子供のこゑがして
花筵山の夕冷え払ひけり
鉛筆でつついて示すぺんぺん草
私語一つ洩らさぬ二輪草の群れ
山ざくら遽か下界といふものあり
動くもの一物もなき花の景
朝風に流離流離と花散るも
山中に何時かは亡ぶ大桜
一行に飛花ふるまへり山ざくら
花ほつほつ咲き出す山に悪路なし
走り根の傍へが花の死に処
お天道様山の桜に花授け
一雨のあと立ち直る桜かな
山桜天を伝ひて風響き
一昼夜風に揉まれて花濃くす
腰どんと地べたに据えて花見かな
山ざくら散るとき音色あらまほし
夜桜の人に混じりて華やがらん

天空へ喉のすりへるまで雲雀
搔き当ててゴツと鳴れるや鬼浅蜷
はためける辛夷に千軍万馬の風
ご老體前はばかり日永の湯
日永の湯人足風の男ゐて
沿線の桜見ながら羽田まで
ジャンボ機の胴にミッキー春休
春服に鶴のマークのクルー嬢
瀬戸内の桜見え来て機は下降
春の日のぽかぽか山陽自動車道
春しまなみ海道の瀬戸原付バイクでタタタと
渡生口島 耕三寺し賃七十五円よ瀬戸の春
デコポンに瀬戸の夕日の大きこと
風一夜天草浮いて生口島
献燈は丸亀汽船樟若葉
波瀬戸内にモデルになりし島あればたふたふひよっこりひょうたん島の春
瀬戸内のおむすび大の春の島
瀬戸内を雑貨など積み春の船
渡り来ししまなみ十橋昼霞
来島海峡単車で飛ばす半ズボン
石手寺に花は散るのみ徒かち遍路
春雨に濡るる石手寺石手川
貸道後公園し練炭貸し莫蔭夜桜真っ盛り
花冷えの坊ちゃん列車待機せる
道坊ちゃん湯後の湯古りて天井扇風機
一古老懐古銭貫うて湯銭五厘の湯の長閑けし
山下清入ってゐさうな道後の湯
道一茶も入りし湯なれば後の湯頤まで浸かりおらが春
おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯
濠松山中学校跡端の花見に夏目金之助

子規筆記幾何学の本のどけしや
子規堂
子規堂の電燈の笠春の埃
つばくろは鰻絵の速さ内子町
内子座の前でつばくろとんぼきる
潮臭宇和島き宿毛の雨に徒遍路
鯛生簀由良のきんちやく入江かな
土佐鶴に鱧の湯晒し春の雨
雨の中漁して鰻の地獄どめ
春驟雨船端叩く川蝦漁
四万十の橋四万十の春の雨
雨合羽光らせ鮓のがらびき漁
絵看高知板潮噴く鯨が泳いじよる
路面電車ひよいと除けゆくつばくらめ
海明り早生り枇杷は四国一
宿の膳何はさておき姫かつを
おぼろ夜のしば天踊り余興の座
春雨にぐにやりと曲る土讃線
海鳥啼きお遍路マツプ備ふ宿
金比羅参り燕出入りの一服茶屋
花人にはいごめんよと上り駕籠
花吹雪ぱっぱと金比羅大権現
花見客もう百段に顔見合はせ
五人百姓花に広がる風流傘
花人の足腰問はる象頭山
汗拭いて七百八十五段の労
夫婦して啜るや春のざるぶっかけ
紫雲しうでさん出山瀬戸に霞をもたらせり
風流倉敷の始め柳に佇むは
歩きつゝ地ビール「独歩」喇叭飲み
糠雨に凄味を増しぬ浦島草

芹の水干上がる窪地に蝌蚪蝟集
町雀雨の落花を足蹴にす
称名寺古図には無かり花の布置
ぎこちなきところ未だあるあめんぼう
花御堂大船 竜宝寺ぼつりぼつりと人の訪ふ
人絶えて風訪ふばかり花御堂
樹下にゐて雀もさくら薬浴めり
ちよこなんとお堂の前の花御堂
風薫じ作務衣で通す日なりけり
堂縁に甘茶の葉罐汲まれよと
閑にして寂たり牡丹の間の土
夜桜の冷え込み上着一枚分
めかり時映画はシルバー料金にて
スキヤキ野毛 大道芸ソングうららにワンマンバンドかな
大道芸なべて陽炎ふ自由席
大道芸蒸す日を火噴き男かな
パントマイム天使の輪っか夏空に
うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴
拙宗雪舟展と名乗りし頃のかわせみ図
雪舟の水と霞の勝景図
つばくらの眼を借り天橋立図
睡るとは不覚穀雨の散髪屋
ぷーんと来る春の蚊にしてあな近き
熱き湯を押し退け入る菖蒲どき
菖蒲湯をざんぶりと出づ赤仁王
噴水の背骨をしゃんと立てにけり
噴水に飽きしその眼を森に遣る
つば西洋美術館くらのめカレーの市民の頭上越え
毛虫のごと空攀ぶジェットコースター
茅花どき旅の一つもせよと云ふ

赤詰草白詰草に勝る丘
著莪に降る雨や雨水のはけ所
散りざまの何たることかチューリップ
ユリの木の花はと街の空を見る
うたたねのホトケドジョウの髯立派
満腹や毛虫の下見でもせんか
さざんくわの毛虫の下見的中す
大蚯蚓仏となりて大異変
風の中紫蘭の内緒話かな
百葉箱葉ざくらの青一途なる
越後長岡 悠久公園まで足を伸ばして田草月
未草目白押しとはこんな様
えごの花虻のお尻の大きこと
葉隠れの朴見んものと一歩横
日に熱す一千枚の未草
山古志山古志村 虫亀闘牛場の牛の角突き一番手
横綱牛幸左衛門に祝儀花
横綱牛藤七相手をじろと睨ねめ
其の上かみの牛の角突き二十ヶ村
豆虎の怪力見せん牛角力
つつかけてごつんと受けて牛角力
赤牛が一枚上手牛合せ
牛合せ勝者の赤毛引き回され
牛合はせ三才牛の尾にリボン
よう放ようは土地言葉で魚の意。よう放しは五月頃の鯉の池入れを指すし山古志村の雨最中
よう放し支度盥に鯉を入れ
ががんぼの猿猴宜しくぶるさがり
快音を谷に響かせ草刈機
養鯉池雨に緋鯉のうすぼんやり
田の蛭にラジオ体操第二番

牛合はせ済めば田植が待ちみたり

田植笠棚田の真下に見えてをり

足音に畦の田蛙算を乱し

青葉木菟ほらほら啼くよたてつづけ

相槌を打つごと別の青葉木菟

出雲崎出雲崎(雲の浦)街道貫けり

花桐のあなたこのみやのもりのこしたにこどもらとあそぶの佐渡は暮れずともよし良寛

良寛の里あぢさゐの万理都関まりつかん

其の上の金の荷揚げ路燕抜け

雲の浦昼夜を舍めず卯浪寄す

早苗月非登利あ處非の旅をして

朱夏の旅詩の囊を携えて

左手より弥彦山へ寄せて高卯浪

桐咲いて鰻の寢床のやうな町

卯浪寄せ佐渡を真正面の宿

涼味満点天上大風てふ地酒

紙風船土産に雲の浦を発つ

碑に千鳥を慕ふ以南の句

良寛堂五月雀の屯せり

みどり立つ難閑耳ぽつんと良寛堂

良寛の桑門の道酢漿草より

夏みかん良寛ここに発心す

目を据ふる卯浪の果てに佐渡が見え

あいの風弥彦山の沖浪白らめ吹く

御天道様和島村蜷の道たること證す

良寛の里あらたまの蛙ごゑ

酒米の田植も済むや和島村

良寛の戒語木村家 良寛戒語百ばかりありと聞けば空木の花の数

木村家の庭に雨乾ぬ車輪梅

良寛墓所隆泉寺尋めゆく頬に植田風

良寛の綽名からすの夏迎ふ
良寛墓所毛虫も托鉢姿して
蛞蝓に好かれて良寛さんの墓
良寛像足許埋む桜しべ

小肥りの毛虫良寛墓石馳す
宇奈具志神社(出田の宮)
通草蔓良寛の書の筆運び

*何れの処にか悉炎を消さむ 独り愛す出田の宮 民々耳に盈つるの蟬 冷々林を出づる
の風

夏けやき戦ぎて耳に盈つ葉音

国上山源八新田田が植り

国上山青葉の葉騒鳶挙げて

国上山青嵐湧きくるめく葉

雲高山国上寺とや桐咲かせ

良寛の疑団も斯くや松ぼくり

堂縁にかがんぼ継る五合庵

竹の葉散る名利の塵を払ふかに
乙子神社 炬一東の薪 誰か問わん迷悟の跡 何ぞ知らん名利の塵

乙子祠の木苺の実を頂戴す

乙子祠に稚き蜘蛛囿を張りにけり

竹の葉散る良寛の世を語り草

海猫のくわいくわい佐渡へ発つフェリー

烏賊釣船きんきらきんの百裸灯

えっさ丸素木の箱に朱鷺基金

船室に雑魚寝卯波の為すまゝに

卯波立つ沖へ乗り出すえっさ丸

亀の頭のごとくが朱夏の雲の浦

船窓に高卯浪みて横坐り

佐渡島畳々として照り卯浪

いちめん夏めく潮路えっさ丸

流れ藻の長短首夏の佐渡航路

佐渡島至る処に小判草

朝の舟揺りつ浦人銀葉草搔くギバサ
入江より漕ぎ出て朝のカツチ*カツチは烏賊の子釣
藻畳の中にて蟹の目覚むらん
かがんぼの交みては飛ぶ複葉機
宿ハチメはあこう 赤魚の膳大膳神社こんがり焼きの黒ハチメ
参道に吹き込む真野の植田風
能舞台脇正面の草刈れり
蜻蛉も一差し舞へる能舞台
能舞台真野の蛙の囃し方
能舞台蛙も一手仕る
菫替職人上と下とで押し問答
田蛙国分寺の貝摺り合はすごとくなり
金北山根本寺けふは晴れたと田のどぜう
面構え佐渡随一のどぜうとも
芍薬の珠日に熱す根本寺
田蛙も塚原問答根本寺
強水こわみずに佐渡の田植*強水は岩間より流れ出す冷水の生まれり
二時間と何んぼの夏の佐渡航路
山滴る島を離れておけさ丸
日焼けして二等船室雑魚寝組
二等船室隣より来る夏の蠅
水脈を見てフェリー船尾に氷菓舐む
其かみの上の病院船は氷菓いろ
道三浦半島 小網代湾一本引き込みアカテガニの森
気散じの虫首擡げチゴガニ見に
蟹奔らせ白南風渡る巾着湾
チゴガニの遠目利く中闖入す
チゴガニの百千萬と我対す
チゴガニの応援団の白手套
チゴガニのラジオ體操散開し

チゴガニの鉋上げ下げバツタンコ
チゴガニの踊を真似て去なんとす
芦騒の煽りくらひてコメツキガニ
コメツキガニ穴に脚かけ警戒す
鳶の糞メロンの蔓を汚しけり
農作業南瓜の玉敷岬晴れて
仕方なくあめんぼ覗いてゐたりけり
黴ぬやう手の打ってあり梅雨食品
迅雷の三連発に天地裂け
京劇の殺陣稽古めく雷最中
雷光に木像ガル―ダ眼を剥いて
雷の尻すぼまりに海の方
落ち方と云ふものあるうがはたた神
言葉尻濁せるごとく雷了る
大リーグすててこ観戦愉しめり
軍配の返りたるごと夕立来
あさつての方から聞え軽き雷
カアネーション妻母として贈られき
少女らのジ―パンの毳ケバ半夏生
甚平著て貴方も齡と云はれをり
臘梅東慶寺の実におやおやと人の倚る
去り状を見て来てほたるぶくろの辺
雨の日の葉影うっすら岩たばこ
見染めたるおきのときめき文字摺草
文字摺草一つの他は皆消えて
あじさ明月院と学生諸君の溢る寺
あめんぼう覗きあるのみ他意あらず
あじさゐをすたとんと過ぐ横須賀線
格子縞羽織り毛虫の三太夫
アラヨツと蠅の一心太助かな

鉄の音遠くよりして薔薇騒然
葭切に念を押されてゐるごとし
梅雨入の鰐逃げしが御用となるニュース
雨の日の蘭鏝を見てリラックス
行末はペレか芝生に球蹴る子
源氏疾うに平家横浜自然観察の森これから螢谷
ほたる待つ谷戸にわくわくしてゐたり
今日は居ずホタルガイドのボランティア
ほたる火の人に當たるもおかまいなく
この谷戸に月と私と草螢
ときに雄渾ときに可憐に谷戸ほたる
螢火を団扇に受けて粹な人
ほたるにも氣に喰わぬ風あると見え
木道をあるく螢の速さかな
遅れ来し人にほうたる居るには居る
隠り沼に遅まきながらと出づ螢
さてさてと螢見の腰上げにけり
螢狩戻りがてらの街明り
孫蟻に呼び掛く「どこへゆくんだよう」
梅雨村田英雄逝くなんぞ吹き飛ばす唄皆の衆
俳梅雨「人生劇場」高らかに
新社員夢あらばこそ「王将」を
新社員世渡り吉良の仁吉たれ
水替えの金魚を洗面器に揺らし
金魚の死因松笠病とや突き止めて
夏鴉開口一番「夜が明けた」
朝靄に起き出す蛾族節足類
蠅の死のあつけなかりし脚拳げて
ラ懷古 船旅パウエルへ夏の密雲生る中
ロシア船員跣足であるくタロ芋島

ごったがへす菖蒲田の径譲り合ひ
たぐり寄す夏掛その内夜も明けん
蠅憎き世の懐かしや畳撫す
明易の己に見えぬそそけ髪
梅雨雀乗りて屋外瓦斯ボンベ
威嚇して地を掠め翔ぶ親鴉
御神域しんと鴉の子育てどき
子鴉の姿もやがて樟の森
みるからに榊はとつつき難き花
宝鐸東高根森林公園草森の冥さに眼が馴れて
あめんぼう木屑のごときがやたら跳ね
水遁の術もて泛けるあめんぼう
溝菽の綻びかけに目を細め
鬼やんま追い駆く目線振り切られ
あめんぼうをぽかんと佇つてみてゐたり
雨降嶺晴れ藪の畝々もっこりと
梅雨の家居あれもこれもと妻頼み
身の内の退屈の蟲鳴き出す梅雨
豆飯の湯気の立つうちただかん
明易の言葉は韻きやすきかな
人語なし明易の鳥ひた啼くに
使ひ古る座右の辞書と梅雨に入る
梅雨入の八百屋そこそこ品揃え
ぎょうさんな実をつけ貧乏症の枇杷
だんご虫転けて宙搔く脚清ら
実梅採る母が長棹えっさつさ
夏の灯に売るアボガドのされかうべ
梅雨妻への家居おんじき飲食の手間かけまする
衣更へて手足すうすうする一ト日
身の危険察知蜥蜴のダッシュユセリ

合歡の花一雨あるやも知れぬ闇

河骨を掠め流水間断なし

称名寺

薫風に仁王の視線やはらげり

青葉木菟いつしか寺に来ずなりぬ

緑さす富貴寺の面取り柱かな